

からこかぎ

第7号 平成26年7月30日(水)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1 青垣生涯学習センター唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

平成26年度 ごあいさつ

会長 梅野 満雄

長い梅雨もようやく明け、本格的な夏がやってまいりました。

去る4月19日(土)、出席者19名、委任状提出32名のもと平成26年度定期総会を開催し、無事終了いたしました。設立以来11回目となる総会には、片倉教育長、寺田教育部長、藤田文化財保存課長、松井指導主事にご臨席を賜りました。

減少傾向にありました本会の会員数は、昨年度末には過去最大の60名となりました。これも多くの会員の皆さまに私どもの活動にご賛同いただいたお陰であると感謝申し上げます。

さて、本年度は、本会として次の10年に向けた新たなスタートの節目の年にあたります。総会でご了承いただきましたとおり、10周年記念事業実行委員会を設立し、NPO法人化に向けての検討や、県内外での記念講演会などを企画してい

ます。9月14日(日)に明治大学リバティタワーにおいて、唐古・鍵遺跡考古学講座を開催します。講師は、本会設立当初よりご尽力いただきました藤田三郎先生ですので、楽しみにしていただきたいと思います。

また、現在、唐古・鍵遺跡の史跡公園整備工事が進んでいます。本会の設立目的であります、「唐古・鍵遺跡の歴史、文化等に理解と愛着を深めるとともに、その保存と活用を支援する」ことを念頭に、今後、本会としてどのように史跡公園を活用していけるのかを検討していきたいと考えています。

最後になりましたが、会員の皆さま方の「唐古・鍵遺跡」に対する熱い思いに感謝申し上げますとともに、会員の皆さまには一層のご協力・ご支援を重ねてお願いいたします。

遺跡とコスモス

大森 初美

今年も、遺跡のコスモスの花を咲かす季節がやってきました。7月26日早朝6時半に会員25名を含む30名の方々が参集しました。

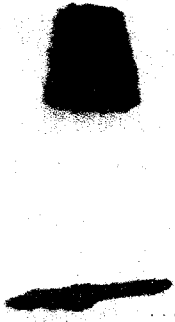
昨年12月に急逝された豆谷和之先生を悼み1分間の黙祷を捧げたのちに、コスモスの種まきを始めました。3年目ともなれば皆さん手慣れたもので、あっという間に作業が完了しました。次回以降は、雑草取りです。ご近所の会員の皆さま、ご参加をお待ちいたします。



遺物紹介(4) — 板状の鉄斧

会報編集メンバー

(1) 今回のミュージアム遺物紹介は、第2室に展示されている第40次調査で出土した小型の板状の鉄斧です。第40次は、田原本町立北小学校の体育館築造に伴う事前調査ですが、板状鉄斧は遺跡南端部の大溝西端の分岐溝（弥生後期から古墳初期まで維持）からミニチュア土器、土製勾玉とともに出土しました。その形状は、長さ(10.1cm)、刃幅(5.5cm)厚(0.7cm)の片刃、梯形平面です。下の写真は、ミュージアムに展示されている板状鉄斧とヤリガンナです。



板状鉄斧の祖形は、稲作とともに伝わった磨製石斧とみられていますが、国内では、弥生中期前半の長崎県の里田原遺跡や佐賀県の干潟遺跡が最古といわれ、主に瀬戸内以東に多く出土しています。因みに、北部九州では袋状鉄斧が主流です。

(2) 特に留意したいのは、刃幅より基部幅が狭い縦長の梯形の形状です。それは、ミュージアムの同一コーナーに展示してある磨製石器の「柱状片刃石斧」と酷似しています。その形状より機能を考えると、当該鉄器は、武器や農具としての使用でなくノミのような木材の加工具としての使用が想定されます。柱状片刃石斧的形態は、別表に掲載した奈良県内の弥生遺跡にはありません。

因みに唐古・鍵遺跡では、板状鉄斧以外では、古墳前期の鉄鏃2点・ヤリガンナ1点が出土しているのみで、弥生期の遺跡での鉄製品の出土例は、少ないといえますが、それは、県内の弥生遺跡も同じ傾向といえます。

(3) 奈良県内での弥生遺跡の鉄器の実態を確認したのが右表です。少し古い資料ですが、「弥生期の鉄器総覧」(川越哲志編)を基に作成しました。同

資料によると、鉄器の発見された遺跡は、全国369遺跡中奈良県内は9遺跡と少数でその後発見された平等坊・岩室遺跡の板状鉄斧(太型蛤刃石斧の形状)を加えても少ないことが分かります。

奈良県の鉄製品と遺跡一覧表

遺跡名	出土品	時期
六条山遺跡	鉄釘	後期中葉
	袋状鉄斧	後期後半
平等坊・岩室遺跡	板状鉄斧	中期末
鴨都波遺跡	棒状鉄器	後期後半
ゼニヤクボ遺跡	鉄鏃2	終末～古墳期初頭
纏向遺跡	鉄滓・鉄片	終末～古墳前期
三井・岡原遺跡	鉄鏃	後期後半
見田・大沢遺跡	鉈・鉄剣	終末～古墳期初頭
法貴寺北遺跡	鉄鏃	終末～古墳初頭
大王山遺跡	鉄鏃	終末期～古墳初頭
	板状鉄斧	後期前半
唐古・鍵遺跡	板状鉄斧	後期

しかし、過去には奈良県内の弥生期の鉄器が少量とする意見は、余り聞かれませんでした。その理由は、古墳期初期のホケノ山古墳、黒塚古墳やメスリ山古墳のように大量の鉄製刀剣類や鉄鏃、鉄戈、鉄製品が副葬され、それが弥生後期の鉄の存在を疑い得ないものとし、その不在理由を、資源である鉄は再利用されたとの説明や土中で酸化し遺存しなかったとする見解が首肯されていました。しかし、全国的に低地での出土を含め出土例が増加するに伴い、それら不存在の見解を疑問視する意見もあります。

一方、唐古・鍵ミュージアムコレクションでは、鉄器による木製品の加工痕跡の研究報告もあり、唐古・鍵遺跡の出土木製品にも鉄器による加工痕跡が残っているとの説明が記載されています。

いずれにしても、唐古・鍵遺跡の第1次調査報告書が提起した古墳期の移行プロセス＝鉄が弥生期の農業生産力の高まりを導き、古墳の出現要因は鉄器の普及とする弥生史観の評価に連なる重要な論点であることは確かです。

古代ものづくり教室から一藍染め編

山本 淳史

今年も七月に藍染をしました、「古代ものづくり」の年中行事に定着したようです。この藍染のきっかけは2012年2月に、ものづくりメンバーの訪問を快く受けていただいた、奈良文化財研究所部長(当時)の深澤芳樹先生です。石器や木器、染色など興味深い話の後に、先生から「皆さん愛(藍)を育てませんか」の呼びかけがあり、毎年研究所で育てている蓼藍の種と、育て方などの資料を頂きました。その資料の中に藍染の歴史が書かれていましたので、一部を照会します。



“高温多湿で肥沃な土地に生育する蓼藍は、中国や日本など亜熱帯から温帯にかけての地域で古くから栽培されていました。インドシナ半島が原産地と考えられ、中国、朝鮮半島を経て、飛鳥時代には栽培法、染色法が日本へも伝えられたようです。(中略)中国では、戦国時代の著作と言われる『荀子』勉学篇に「出藍の誉れ」の諺が見られるように、紀元前3世紀頃には藍染の技法が完成していたと思われます。染色法には二つあり、ちぎった生葉を水に浸けてその染液で染めるのが生葉染、繊維の内部まで均等に染まり、灰などのアルカリ性で繊維を傷めることもありません。もう一つは建染といい、木灰などアルカリ性の溶液に藍を入れ、18℃以上の温度を保つと藍に含まれる菌の作用で還元した色素が溶解するのを応用した方法です。中世には「座」の発達で藍染を専門にする紺屋が日本各地にでき、木綿との相性のよい染法が発明され季節を問わず藍の染色が可能になり、期間が限定される生葉染は衰退していくことになりました。”

現在では、藍染といえば染法ですが、時間とともに青色に変化する藍染を身近に体験できるのは、やはり生葉染です。先生に教えて頂いた方法は至極単純です。細かくカットした蓼藍の葉に少量の食酢と適量の水を加え、葉を揉みインドキシルが含まれる液を作ります。この液を濾過すると、染液の出来上がりです。この染液に絹布を約30分浸け、陰干します。最初は少し黄色みがかかった緑色をしていますが、空気に触れたインドキシルが酸化すると、インディゴに変化し鮮やかな青色になります。これで作業終了です。ただし作業は手早くすること、染液は生き物です。時間とともに酸化し染色力が衰えます。これが欠点でもあり、面白味でもあります。

つぎに、赤色の染色ですが、唐古・鍵考古学ミュージアムにアカニシが展示されています。この貝殻には赤紫の染色に利用するパープル腺を取り出した痕跡があります。でも、身近な草木染で赤が出せないか。発想が短絡的ですが梅干漬け用の赤紫蘇の葉で試みました。驚いたことに藍の生葉染と同様の方法で美しい赤色に染色できました。これからも様々な色に、失敗を恐れず挑戦したいと考えています。



今回、私たちが使用した藍はメンバーの川端さんが育てました。乾燥に弱いので、朝夕の水遣りが欠かせず夫婦で迂闊に外出ができなかったと、苦労話をされていました。今回はその苦労が実り今までになく藍(愛)の深い色に染めあがりました。感謝感謝です。

(写真は、深澤先生の研究室とものづくりメンバーの藍染め作業中の一枚です。)

第9回 弥生勉強会に参加して

植田 洋高

第9回弥生勉強会は、昨年12月1日(日)に集合し当麻寺駅を10時に出発しました。12月の開催となり、天候や気温も心配されましたが穏やかな1日になりました。今回も遠方よりの参加者を含め多数(約20名)参加いただきました。

今回の遺跡は、奈良盆地西南部の二上山と葛城山東麓にある竹内遺跡と脇田遺跡を中心に、葛城市の弥生遺跡を探訪しました。竹内街道や県道山麓線沿いにある遺跡のため、前回までの探訪に比べ高低差のある行程になり、距離もかなり歩きました。

最初意図した竹内遺跡は、葛城山に水源を持つ熊谷川により形成された扇状地形に位置する遺跡です。県道山麓線の建設に伴う事前調査を中心に調査がなされ、当麻寺参道の北エリア(縄文晩期から弥生前期新段階の活動域)、南エリア(縄文晩期の活動域)及び竹内街道交差点北西エリア(弥生期の積極的な活動域)に分類され、縄文、弥生期の集落の推移が解ってきました。また、北

エリアで、藤田先生より地形の説明をうけ、遺跡の確認には地理的条件の理解が最も重要であることを改めて痛感しました。

葛城市内の弥生期の遺跡は、11箇所7遺跡が報告されています。現在のところ発掘面積が限られており、弥生期の遺跡面の検出も少なく、拠点集落といえる遺跡の発見はありません。しかし、縄文の大集落である竹内遺跡から中・後期の遺物が出土する太田遺跡、西室弁之庄遺跡を經由して弥生中期の方形周溝墓が検出された脇田遺跡まで歩くと弥生文化の伝播のルートは、御所市に近接した扇状地末端側からのものであることがわかってきました。

今回の探訪地は、古くから河内と大和を結ぶ地域にあり、弥生期においても今後新たな発見も期待できるのではないのでしょうか。

今後、奈良盆地だけでなく畿内の弥生遺跡の歴訪も計画したいとの説明もありました。今後とも、宜しくお願いします。

今年もコスモスを咲かせよう

8月16日(土)・9月7日(土)・20日(日)

早朝6時30分・遺跡コスモス畑に集合

第11回弥生勉強会のご案内

一 国府遺跡とその周辺遺跡

井上 知章

1 はじめに

第11回の弥生勉強会は、8月の酷暑を避け座学での勉強会となります。前回の「四分遺跡と明日香村の弥生遺跡」では、島庄遺跡(石舞台遺跡周辺)から四分遺跡に至る縄文後晩期から弥生終末期までの地域の地形変化とその地勢と適合した遺跡の推移を確認しました。今回は、大阪府藤井寺市惣社にある国府遺跡及びその周辺遺跡を例に「地形と集落の変遷」という視点で、再度確認したいと思っています。なお、当該遺跡は、6月に

古代ものづくり教室の23名が、遺跡公園の整備・活用状況を確認しました。

今回は事前勉強会が開催されませんので、遺跡の概要をあらかじめご説明いたします。

2 国府遺跡

(1) 概要

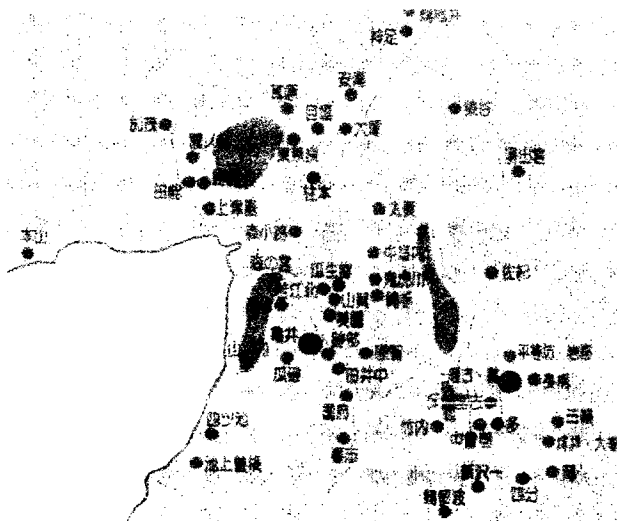
国府遺跡は、羽曳野丘陵北東部の国府台地先端、標高20~25mの中位段丘面に位置します。遺跡(東西500m・南北300mの範囲)は、大和川・石川合流地点に近接しており、その合流地点には、縄文晩期の標識土器(口縁部と体部の境に刻み目突帯を施した深鉢・浅鉢・壺から構成)で知られる船

橋遺跡があります。

国府遺跡は、旧石器時代から室町時代に及び複合遺跡で、小字名が骨地と呼ばれるほど古くから人骨が認められた地点です。戦後まもなく発見された群馬県岩宿遺跡先土器時代の石器よりも早い大正6～8年に後期旧石器時代(33000～12000年前)の石器(20000年前頃)が発見されています。残念ながら、当時は、出土した100体近くの縄文人骨に関心が寄せられ、国内初の大発見は注目されませんでした。

なお、付近に、旧石器時代の住居跡が検出されたはさみ山遺跡があります。日本最古の住居址の一つですが、そこから4本の柱穴とともに国府型ナイフ形石器が出土しています。

(2) 地形



改めて地形を確認します。国府台地(東西1km・南北4.5km)は、中位・下位・沖積段丘が高度差を異にして広がり、その北側方面には、北西に流向していた旧大和川の中小河川によって形成された沖積平野が広がり、氷期以来の海水準(海退進)の変動により地形もめまぐるしく変動を受けたところ。その一帯は、畿内第I様式期以前の水田状遺構が検出された若江北遺跡をはじめ河内湖の初期水田跡が多く存在します。当日は、初期水田の推移を確認する予定ですが、旧大和川の河口付近にあった若江北遺跡→山賀遺跡→友井東遺跡→美園遺跡という順で稲作情報は南下した

といわれています。

(3) 遺跡の推移

縄文前期は、国史跡エリア(100×150m)の範囲に集中し、中期は他の縄文期の遺跡と同様に希薄となりますが後期になると林遺跡や土師ノ里遺跡方面に分布域が拡大します。更に弥生前期には、集落の活動が活発となり、国史跡エリアでは350×300mの範囲に拡大し大規模な集落を形成し、中期も同様の傾向を示しますが、中期後半には台地北縁を西側、東側に分布域が拡大します。

このように、弥生期の全期間を通じ遺跡は存続していますが、その理由として打製石器の製作や原材料の供給に一定の関与をしたことを挙げる意見があります。確かに、一般的な土坑と異なり、生活廃棄物と共伴しないサヌカイト片のみの廃棄坑が検出され、時期は弥生中期後半とされています。その評価について、当日議論をいたしたいと思っています。

3 遺物等

(1) 国府型ナイフ石器

特に、著名なのは昭和32年に縄文遺物包含層の下層から出土した横剥ぎ(横長剥片剥離技術の一種)のナイフ形石器です。サヌカイトの原産地を中心に近畿、中国、四国に発達したことより、その技法を瀬戸内技法、石器を国府型ナイフと命名されています。勉強会当日には、ものづくり教室メンバーにその工程を説明してもらいます。

(2) 瑛状耳飾等

遺跡からは瑛状耳飾6対が出土し、作成方法及び装着方向が分かりました。縄文前期中葉から後葉中期の時期のものとされていますが、一部の女性のみの着用からその時期の集落の階層差をみる意見も有ります。また、出土した叉状研歯をした人骨には腕輪や腰飾りを装着した例も報告されており、同じく階層差をみる意見もあります。弥生期に先立つ縄文期の階層性について、改めて考えてみたいと思います。

(3) 土器胎土

在地胎土と生駒西麓産胎土が、弥生期を通して使用の割合が変化しているとの報告があります。特に、後期段階になると在地胎土が全てを占めるとされ、それを石器の放棄と生駒西麓産胎土の減少とあわせ河内地区の分業体制の崩壊と評価する報告書の所見です。果たして如何でしょうか

4 まとめ

1910年代に濱田耕作先生がご自身の国府遺跡の発掘成果を基に縄文式土器、弥生式土器、土師器

が層位的に分かれて出土することを根拠に、弥生時代を金石併用時代と確認されました。その後、濱田先生が直接に発掘指導された唐古・鍵遺跡の第1次調査により、そのことが実証されました。

今回は、唐古・鍵遺跡とも関連の深い遺跡です。改めて、学史的意義のある国府遺跡を確認したいと当日を楽しみにしています。

日本酒の原料について

植田 洋高

(米について)

日本国内では現在、約300種類の米が栽培され、清酒はこれらの国内産米で造られています。特に農産物規格規程で醸造用玄米と呼ばれる米は酒造好適米ともいい、優れた清酒の原料米です。

1) 酒造好適米の条件

主食として食べている一般米も日本酒の原料として用いられますが、一般米は、主に日本酒の基になるもろみに仕込まれる掛米として使われます。

日本酒造りに適している米は、酒造好適米です。特に、酒造好適米は、麴つくりに適しており麴米として用いられます。麴米は、米に含まれるデンプンを分解して発酵させやすくする麴菌が繁殖し麴を造ります。

酒造好適米の最大の特徴は心白があることです。心白は、米の中央にある円形の白色不透明の部分で、心白のある米を「心白米」と呼びます。心白部はデンプンが少ないため、光を当てると乱反射し白濁して見えます。また、やわらかい麴菌の菌

糸が中に伸びやすく強い酵素力のある麴をつくり、酒母、もろみ段階での糖化も良好です。

〈酒造好適米の条件〉

- ① 大粒であること (千粒重 25~30g)
※千粒重：大粒かどうかを表すときに使われる単位の一つで、千粒分の米の重さです。
- ② 心白があること (白色不透明部分)
- ③ タンパク質・脂肪が少ないこと
- ④ 吸水率がよいこと
- ⑤ 外硬内軟性に富むこと (蒸しあがり)

〈酒造好適米の栽培条件〉

- ① 朝晩の寒暖の差が大きい場所であること
- ② 栄養分を豊富に含んでいる土壌であること
- ③ 苗の間隔をあげ、日当たり通気性を良くすること
- ④ 栽培技術にたける農家の手があること

*代表的な酒造好適米

「山田錦」・「五百万石」・「美山錦」

遺跡紹介 (3) —中西遺跡

弥生勉強会世話人グループ

今回は、第3回弥生勉強会で訪れた「中西遺跡」を紹介します。中西遺跡の第20次調査の概報に

よると、京奈和自動車道御所区間関連の調査も終了したとのことです。そこで、当時、話題となった弥生時代前期末の中西遺跡の水田遺構を中心にご紹介したいと思います。

1 中西遺跡の概要

中西遺跡は、奈良盆地の東南部の御所市大字條に所在し、JR玉手駅から西南方向に徒歩20分の所にあります。周辺には、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く点在し、最近の調査では、それらの下層から縄文期の遺物包含層も確認されています。過去の調査より既に室宮山古墳付近まで延びる広範な範囲が想定され、弥生時代～古墳時代、中世にかけての複合遺跡であることが判明していました。御所市は、西に金剛山、葛城山、南部に巨勢山丘陵があり、東には国見山、高取山に囲まれており、遺跡は巨勢山丘陵を背に、標高105～110mの扇状地上にあり、南西から北東に向かう緩やかな傾斜地形に位置します。



そして、全国的にその名を知られたのが第14・16・18・20次調査で検出された弥生前期の水田跡です。その最大の特徴は、隣接する秋津遺跡の前期水田跡を合わせると27000㎡以上の耕地面積を有する小区画水田の検出で、さらに東西の方向に広がる可能性が指摘されています。(写真は第18次水田址)

発掘報告書や現地説明会資料の記載には、その水田面積から当時の国内有数の穀倉地帯とし、「大和はのちの古代国家成立の地であり、その成立の背景には早くから稲作を中心とする安定的な経済基盤を構築することができたという社会的・経済的環境が寄与した可能性が高い」(第18次現地説明会資料)と評価されていました。

2 水田遺構

遺構面は、縄文時代後期から晩期に堆積した土壌に形成され、弥生前期末の洪水砂によって被覆され、水田土壌より大和Ⅰ-2-a様式、その被覆層より大和Ⅱ-1様式の壺形土器が出土することから畿内Ⅰ様式中段階以降とみられます。放射性炭素年代測定の暦年較正年代は、概ね500calBC前後を示しており、土器編年とも符合します。また、イネの植物珪酸体分析も高密度で検出されており、確かに前期末の水田経営を裏づけています。

(但し、水田関連遺物は、石包丁破片1点。)

検出された遺構は、小区画水田・溝・島状高まり等があり、堰などの水利施設はなく小畦畔には水口があり、その水田経営は、100mに1mの緩傾斜地形を利用した畦越しのかけ流し方式であったことが分かります。また、土壌は、暗オリーブ灰色シルト質粘土を中心に灰白色砂礫層を示しており、水田は湛水状態であったことも示しています。

なお、京奈和自動車道蛇穴(さらぎ)地区(今出遺跡)2009年度試掘調査で滋賀里Ⅳ式深鉢(長原式土器)に19点の種子圧痕と炭化種子1点が観察され、その一部に種柄の特徴的な形態が確認できると報告されており、地域のコメ情報はその時期にまで遡ることが分かります。

3 まとめ

付近には、橿原市萩之本遺跡など前期の水田跡が発見されており、その生産力の評価が問題となります。具体的には、1000面を超える小区画水田の評価です。過去に「弥生水田の老朽化」が問題提起されたことを思い出されます。

湿田の場合、土壌成分中の鉄・マンガンは、還元作用により水田中の硫化水素の発生を押さえますが、土壌中の鉄分が減少すると発生する硫化水素(化学反応し硫酸となります)によって稲が痛められます。そのように鉄分の不足した水田を老朽化水田と呼ばれています。「農地の地味」が落ちるといふ現象です。

当該地域は、鉄分の含有量の少ない花崗岩質土壌であり、更に過剰な水田供給水に加え報告されているように遺跡の水田は作土が薄いということなので、鉄分が流亡し不足したと思われまます。従って、採取生活を継続していた時期を考慮すると、地味が落ちると次の農地を利用するという構

造が推測され、それが数多くの農地を形成した理由とする一つの仮説が導かれます。

いずれにしても、弥生期の社会構造を規定する生産力の評価は重要です。今後はこの仮説の妥当性を含めご議論をお願いいたします。

小学校総合学習の支援活動

今西 和代

一学期は、ミュージアム見学を皮切りに土器づくり、勾玉づくり、火熾し、脱穀、炊飯のメニューを南・北・田原本・平野・東小学校六年生 295 名に行ないました。天候にも恵まれ、会員の皆様のご協力をいただき無事に終えることができました。町内5校の小学校に行くたびに児童たちの感動の声を聞かせてもらい、『喜んで良かった』と次の活動に繋がっていきます。

二学期の予定は、別表のとおりとなっています。課題でした野焼きや炊飯の用いる木材・藁の確保でした

が、各小学校校区の工務店や大工さん、および工場から出る廃材を分けてもらう予定となっており、一安心です。これからも会員の皆様の参加をお願いします。



お知らせ

事務局

弥生勉強会

日時 8月31日(日) 10時～12時
場所 ボランティア室
内容 国府遺跡と周辺遺跡
参加 自由参加です。

学校支援日程表(10月分)

10月2日 東小(土器づくり)
10月3日 北小(土器づくり)
10月10日 平野小(土器野焼き)(17日予備日)
10月24日 東小(野焼き・炊飯)(30日予備日)
小学校には、8時30分集合です。

ものづくり教室日程表

日時 9月・10月第2・4水曜日外 10時～15時
場所 田原本町青垣生涯学習センター1階工作
参加 自由参加です。
予定
8月13日(水) 苧麻糸紡ぎ
8月22日(金) 土器用土づくり
8月27日(水)～ 土器づくり
9月10日(水) 磨製石器づくり外
9月24日(水) 磨製石器づくり外
10月8日(水) 石包丁徳刈り体験
ご希望の方は、開催案内メールをお送りします。

土器づくり

日時 8月~~27~~・28・30・31日、10時～15時
場所 田原本町青垣生涯学習センター1階陶芸室
参加 1日のみの参加も可能です。
例年のとおり、弥生土器をつくりまます。
ご希望の方は、事務局の電話にてお申し出ください

編集委員 井上知章 植田洋高 大森初美
谷口敬子 花坂志郎 福島道昭